立山における地蔵信仰

多賀　康晴

はじめに

立山信仰の世界観を現した「立山曼荼羅」には、さまざまな仏の尊格が描かれている。「立山曼荼羅　大仙坊A本」には、雄山の山頂付近に阿弥陀如来と二十五菩薩、阿弥陀三尊（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）の来迎が描かれている。これは、「立山曼荼羅」が制作された江戸時代には、立山信仰の中核が阿弥陀如来であることを示している。しかし、その他にも、玉殿窟には阿弥陀如来とともに不動明王が描かれ、他にも賽の河原の地蔵菩薩、血の池地獄の如意輪観音、地獄谷や芦峅寺閻魔堂の閻魔王、媼堂の媼尊など、多くの仏尊が描かれている。

このうち、地蔵菩薩については、11～12世紀に成立した『本朝法華験記』や、12世紀前半に成立した『今昔物語集』には、立山の地獄に堕ちた罪人が地蔵によって救済される説話が収録されている。また、文正元年（1466）に芦峅寺に祖母堂（媼堂）・炎魔堂とともに地蔵堂が造営されていたことが、神保長誠の寄進状からうかがえる。

〈芦峅寺文書四〉[1]

奉寄進　越中國葦峅堂支

合拾貫文

右此析足者、祖母堂・地蔵堂・炎魔堂三ヶ所、致沙汰雖爲年貢、以別志、彼堂造榮所奉寄進也。但此三所堂造榮無沙汰候者、可致勘落者也。仍寄進之状、如件。

文正元年（1466）丙戌六月三日　　（神保）長誠（花押）

さらに、現在芦峅寺閻魔堂境内に六地蔵が祀られているほか、明念坂や芦峅寺集落の墓地に多くの地蔵菩薩が祀られることから、地蔵菩薩が立山で広く人々の信仰を集めたことがわかる。

このような地蔵信仰とはどのようなものか、そして、どのような経緯で立山信仰に取り入れられたのかをうかがってみたい。さらに、立山山麓の芦峅寺に現存する鋳造仏や石造仏を通して、近世における地蔵信仰の一端を見ていきたい。

さて、立山信仰の特色の一つとして、立山は地獄谷の自然景観から「地獄の山」として認識されていてことがあげられる。『今昔物語集』には「日本國ノ人、罪ヲ造リテ多ク此ノ立山ノ地獄ニ堕ツ」と記され、広く人々に知られることとなった。それでは、地獄に堕ちた人はどうなったのであろうか。

『今昔』巻十七「堕越中立山地獄女、蒙地蔵助語第二十七」には、立山地獄に参籠した僧延好の前に女性の亡霊が現れ、日夜三度地蔵菩薩が現れて、「我ガ苦ニ代リ給フ」たという。延好は女性の頼みで父母・兄弟のいる京都七条を訪れてこのことを伝え、遺族は仏師に依頼して三尺の地蔵菩薩一躰を作り、法華経三部を書写して法会を催した。これについて久保尚文氏は、「平安時代の“立山信仰”の様相は『今昔物語集』等に示されるが、それらの説話において顕著なのは法華信仰であり、地蔵信仰である」とした[2]。また、高達奈緒美氏は『本朝法華験記』や『今昔物語集』、『地蔵菩薩霊験記』等の分析を通して、「古代・中世を通じて、地蔵は主に地獄抜苦の利益によって広く信仰されてきた。これらの説話においては、現し世に表れた立山の地獄を舞台に、そうした地蔵の利益が説かれている」ことを指摘した[3]。経典や『往生要集』（源信著、寛和元年〔985〕成立）のように観念の地獄ではなく、現実の世界である立山地獄における地蔵救済の信仰が広まっていたことを示している。米原寛氏は、鎌倉時代になると、末法思想の広まりや「熊野縁起」の影響な

どで、立山信仰に、従来の地蔵信仰に加えて新たに阿弥陀信仰が入り込み、これまでの死後供養と滅罪を願う地蔵信仰とともに、さらに阿弥陀を念じて極楽に往生を願うという「地蔵信仰と阿弥陀信仰の二重構造」がみられたと指摘している。そして、「江戸時代中頃に成立した『立山曼荼羅』には、立山地獄谷における滅罪儀礼とともに懺悔と贖罪が行われ、この滅罪を経てはじめて、浄土山から二十五菩薩の来迎にあずかり、やがて立山山頂の雄山の本地仏、阿弥陀如来に救われる場面が描かれている」と述べている[4]。江戸時代には、立山権現の本地仏である阿弥陀信仰が中心ではあるが、地蔵信仰も依然重要な要素として、立山信仰の中に位置づけられていたと考えられる。

1．地蔵信仰

1－1．地蔵菩薩を説く経典

地蔵は、サンスクリット語で「クシティ・ガルバ」という。「クシティ」は「土地・大地」、「ガルバ」は「胎、蔵」などと漢訳される。日本では、11世紀に三井寺の僧実睿が撰した仏教説話集『地蔵菩薩霊験記』に「大地が遙かな昔から万物を生み出して、嫌がったり疲れたりすることがないように、地蔵菩薩は、すべての衆生に大慈悲で接することに疲れたり飽きたりすることがなく、あまねく利益を施す。だから地と名づけられる。また、世間で蔵の中に財宝や穀物を貯えて、窮乏した人々のために使うことがあるが、同じように、地蔵菩薩は衆生を救う力を貯えて、尽きることなく大慈悲の教えで導き、衆生の煩悩の苦を除き、仏心の萌芽を成長させる。そこで蔵と名づけられる。」とある[5]。

地蔵菩薩の功徳を説く経典としては、まず、「地蔵三経」とよばれる『地蔵菩薩本願経』『大乗大集地蔵十輪経』『占察善悪業報経』がある。これらは、隋（581～618）・唐（618～907）の時代に中国で漢訳されたものである。このうち、『本願経』には、「われ（世尊）忉利天宮にありて、慇懃に（地蔵に）付嘱す。……時に地蔵菩薩摩訶薩、仏に申していわく、世尊よ、われは仏如来の威神の力を承るゆえに、百千万億世界に遍く、この身形に分れ、一切の業悪の衆生を救抜す。……われ、いままた仏の付嘱を蒙る。阿逸多（弥勒）の成仏に至るこのかた、六道の衆生をして渡脱せしめん。」とある[6]。仏が忉利天で地蔵に、釈迦入滅後56億7000万年後に弥勒が出世するまでの無仏世界で苦しむ衆生の救済をゆだねたので、地蔵はあらゆる場所に身をかえてあらわれ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道の衆生を救うというのである。

こうした無仏世界における地蔵の利益は、大きく二つあると経典に記されている。その一つは、六道悪趣の衆生の救済である。『本願経』称仏名号品には、「仏、地蔵菩薩に告ぐ、なんじいま慈悲をおこし、一切罪苦六道衆生を救抜せんとして、不思議のことを演ず。」とあり、地蔵抜苦こそが、地蔵の本願の特色であることを示している。もう一つは、日常における多種多様な現世利益である。『十輪経』序品には、飲食・宝飾・医薬などが充足し、病も除く、といった現世利益を記し、『本願経』地神護法品には、地蔵像を造って供養すれば、土地は豊壌、家宅は永安、長寿で水火の災いもない、といった「十種の利益」があるとする[7]。このような地蔵信仰は、唐の時代に中国で盛んとなり、奈良時代に入唐僧などによって日本に伝えらたことが、東大寺正倉院に残された写経文書からわかる[8]。

次に、中国で撰述された『預修十王生七経』であるが、「預修」とは「あらかじめ修するということ」で、人は死後に冥土で十人の冥王から裁きを受けなければならいことが説かれ、その苦しみを免れるために生前七七、四十九日の供養をなすことが要請される。また、十王に自分の名を伝えておけば、死後苦しむことなく、すぐに安楽な所へ生まれかわることができるという。真鍋広済氏は、この経典は中国の宋代末に流行したと推定している[9]。

さらに、平安時代末期に日本で『地蔵菩薩発心因縁十王経』が作られたと考えられる。『預修十王生七経』と同じく冥土の十王が説かれているが、十王にそれぞれ対応する本地としての尊格が次のように示され、閻

羅王の本地は地蔵菩薩であることが記されている[10]。

一七日	秦広王	不動明王
二七日	初江王	釈迦如来
三七日	宋帝王	文殊菩薩
四七日	五官王	普賢菩薩
五七日	閻羅王	地蔵菩薩
六七日	変成王	弥勒菩薩
七七日	太山王	薬師如来
百日	平等王	観音菩薩
一年	都市王	勢至菩薩
三年	五道転輪王	阿弥陀如来

『発心因縁十王経』には、死者が臨終の後にたどらねばならない冥土の旅路が説かれる。そのうち、五七日には、亡者は閻魔王庁に送られる。閻魔庁の門の両側に檀荼幢、閻魔庁の中にある光明王院には浄玻璃鏡があって、閻魔王はこれらをもとに処分を決定するのだという。また、閻魔庁には善名称院という建物もあり、そこは門や樹木は金銀などの宝、池には美しい蓮の花が開き、地蔵菩薩の住まいする浄土である。ただし地蔵菩薩はこの浄土にいつもいるわけではなく、毎朝早く種々の禅定に入り、その後、あちこちの場所に赴き、人々の家や門に立つ。その家の人が信心深く地蔵菩薩を念じていたならば両手を開いてにっこり笑い、不信心であれば左手の中指で胸の上を指さし、嘆き悲しんで去って行くという。また、地獄や餓鬼・畜生の世界に入って行って衆生を救う。地蔵菩薩が日々怠ることなく衆生を救うのは、昔に大願を起こしたからだという。『地蔵菩薩本願経』などに説かれる地蔵菩薩の十二の誓願とは次の通りである。

一、地獄において衆生の苦しみを代わって受けよう。
二、飢えに苦しむ餓鬼に食を施そう。
三、殺し合う動物を助けよう。
四、争い合う修羅の世界を和解させよう。
五、信心する人を禅定に入らせよう。
六、短命を怖れて地蔵菩薩を念ずる人に長寿を与えよう。
七、病気に苦しみ地蔵菩薩を念ずる人を治してあげよう。
八、王難（権力による迫害）に苦しみ地蔵菩薩を念ずる人を、許してもらえるようにしよう。
九、怨賊の難を怖れて地蔵菩薩を念ずる人に、そのような災難がないようにしてやろう。
十、貧苦にあえぎ地蔵菩薩を念ずる人に、豊かな衣食を与えよう。
十一、官位を願って地蔵菩薩を念ずる人が高い位を得られるようにしてやろう。
十二、臨終の時に地蔵菩薩を念じたならば、身を現して救ってやろう。

以上の誓願を実現することができなければ、決して悟りの境地に入ってしまうことはない、というのが地蔵菩薩の誓願である[11]。この誓願により、地蔵菩薩が六道に苦しむ衆生を救うこと、地獄で苦しむ衆生の身代わりとなること、病気や災難、貧苦に苦しむ人々を救い、長寿を与えるという、地蔵菩薩の功徳が説かれ、六道抜苦と現世利益をかなえる地蔵信仰が、平安末期以降、人々の間に広まっていくことになる。

１－２．地蔵説話

日本の古代社会は、９世紀末から10世紀にかけて、藤原摂関体制の成立という、大きな転換点を迎えた。藤原氏との政争に敗れた多くの没落貴族が出現すると、慶滋保胤を代表とする文人貴族を中心に現世否定的意識を背景とする浄土教が発達した[12]。11世紀になると、貴族の支配体制が動揺し始めたのは末法の世のあらわれと貴族たちが理解し、浄土教は全貴族社会に広まった。富と権力を持つ上流貴族は、無常の現世に

極楽浄土の幻想を享受しようとして、阿弥陀堂を競って建立する一方、心ある僧侶の間では、末法下の浄土教のあるべき姿が真剣に模索され始めた。彼らは貴族社会の栄達を捨て、世俗化した教団を離れ、別処に隠遁したり、あるいは民衆の間に入って布教活動を行うようになった。彼らの活動を通じて、今まで貴族社会を中心に広まっていた浄土教が、地方の民衆の間にも浸透するようになった。そしてまた地蔵信仰も、この時代になると民衆の間に広く定着するようになった[13]。

『地蔵菩薩霊験記』（実睿編、1033年～1068年頃に成立）はわが国の最初の地蔵説話集として有名である。一方、12世紀前半に成立した『今昔物語集』は、巻十七に三十二編の地蔵説話を含んでいるが、これらのほとんどが『霊験記』原本によって書かれた[14]。これら『今昔』説話にあらわれた地蔵信仰の特色について、速水侑氏は、説話の主人公に大寺院の高僧や貴族が少なく、いわば庶民的民衆的であること、地蔵は庶民の日常生活の場に深く入り込んで人々を救おうとしており、地方の無学な貧しい人びとでも、深く地蔵の悲願を信じ、専心救いを求めれば、生身の地蔵に値遇でき、まことに地蔵信仰こそは、「民衆的世界に深く根を下していた信仰の一形態」であろうと述べている[15]。

さらに鎌倉時代に入ると、地蔵信仰はますます民衆の間に浸透していく。弘安６年（1283）に成立した仏教説話集『沙石集』（無住著）巻第二の「(五)地蔵看病給事」には、鎌倉に住む帥僧都が重い病を患い日数を経た時、「若キ僧ノ、美目形チウツクシキガ、エモイハズ看病スルアリ」と僧都が問いかけたが他の者には見えず、弟子どもが「地蔵菩薩ノ御看病候ケルニヤ」というと、「ゲニ〳〵サモヤアルラン」と感涙を流したとある。そして「地蔵薩埵ハ慈悲深重ノ故ニ、浄土ニモ居シ給ハズ。有縁盡ザル故ニ、入滅ヲモ唱給ハズ。只悪趣ヲ以テ栖トシ、罪人ヲ以テ友トス。(中略)此菩薩ハ機根ノ熟スルヲモマタズ、臨終ノ暮（ゆふべ）トモイハズ、鎮（とこしなえ）ニ六趣ノ衢（ちまた）ニ立、旦暮（たんぼ）ニ四生ノ族ニ加リテ、縁ナキ衆生スラ猶助給フ。」「地蔵ハ六趣四生ノ苦ヲ助ケ給フ。諸仏菩薩ノ利生ニ勝レタリ。」とあり[16]、地獄・餓鬼・畜生の悪趣を栖とし、罪人を友とし、縁なき衆生を六道の分かれ目にあって救済するというのが地蔵菩薩のご利益であり、常に我々とともにいるというのである。

１－３．説話に描かれた立山の観音・地蔵・阿弥陀信仰

平安時代末期に浄土教思想が広まるなかで、『往生要集』（源信、寛和元年〔985〕成立）に記された地獄の世界が実在する場として、立山は世の人々に知られていくこととなった。それは、『今昔物語集』巻第十四「修行僧、至越中立山會少女語第七」に、「今ハ昔、越中ノ國、(欠)ノ郡ニ立山ト云フ所有リ。昔ヨリ彼ノ山ニ地獄有ト云ヒ傳ヘタリ。（中略）而ルニ、昔ヨリ傳ヘ云フ様、『日本國ノ人、罪ヲ造テ、多ク此ノ立山ノ地獄ニ堕ツ』ト云ヘリ。」と記されていることからもわかる。さらに、次のような説話が書かれている。あるとき、三井寺の僧が修行のために立山の地獄の原に行くと、山中で一人の女に会った。そして僧に対して、「我ガ為ニ法花経ヲ書寫供養シ奉テ、我ガ苦ヲ救ヘ」と父母に伝えて欲しいと告げた。僧は、女が地獄で苦を受けているのになぜここにいるのかたずねると、女は「然レドモ、十八日ニ、只一度精進シテ観音ヲ念ジ奉タリシ故ニ、毎月ノ十八日ニ、観音、此ノ地獄ニ来給テ、一日一夜、我レニ代テ苦ヲ受ケ給フ也。其ノ間、我、地獄ヲ出デヽ、息ミ遊ブ。」と観音の代受苦を述べた。僧は近江国蒲生郡に住む父母を訪ねてこのことを伝えると、父母は女子のために法花経を書写供養した。その後、父の夢に女子が現れて「我レ、威力・観音ノ御助ニ依テ、立山ノ地獄ヲ出デ、忉利天ニ生レヌゾ」と告げた[17]。この説話では、女性は法華経と観音の力によって、立山の地獄を出て、帝釈天の住む忉利天に生まれ変わった。

さらに、『今昔』巻第十四「越中國書生妻、死堕立山地獄語第八」では、越中国の国司の役所の下級官吏である書記生の妻が病で亡くなった。三人の子供が立山の地獄を訪れると、地獄の巌の間から母の声が聞こえた。母は「罪ミ深クシテ輙ク此ノ苦ヲ難免シ。」と、地獄での苦しみを伝えた。子供たちはどのようにすれば救えるか尋ねると、「一日ニ法花経千部ヲ書寫供養シタラムノミゾ、此ノ苦ハ可遁キ」と告げた。それを聞いた三人の子供は国司に相談すると、国司は能登・加賀・越前など縁有る人に法花経書写を勧め、ついに千

部の法華経を書写し、法会を儲けて供養した。その後、子供の一人である太郎の夢に母が現れ、「我レ、此ノ功徳ニ依テ、地獄ヲ離レテ忉利天ニ生ヌ。」と記してある。ここでは、やはり法華経信仰が中心である[18]。

一方、巻十七「堕越中立山地獄女、蒙地蔵助語第二十七」には次のように記されている。

修行僧延好は、越中立山で、京七条の女人の霊にあった。女人は、「而ルニ我レ、生タリシ時、祇陀林ノ地蔵講ニ参タリシ事、只一両度也。其ノ外ニ更ニ一塵ノ善根ヲ不造ズ。而ルニ、今ノ地蔵菩薩、此ノ地獄ニ来リ給テ、日夜三時ニ我ガ苦ニ代リ給フ。」とある。延好は哀れんで女人の家族が住む京都七条に行き、女人の父母・兄弟に会って、このことを告げると、家族は「忽ニ佛師ヲ語テ、三尺ノ地蔵菩薩ノ像一躰ヲ造リ奉リ、法花経三部ヲ書寫シテ、亭子ノ院ノ堂ニシテ、法会ヲ儲テ供養シ奉リツ。其ノ日ノ講師、大原ノ浄源供奉ト云フ人也。法ヲ説クニ、聞ク者、皆、涙ヲ不流ズト云フ事无シ。」と、仏師に頼んで三尺の地蔵菩薩一躰を造り、法花経三部を書写して法会をもうけて供養した。そして「地蔵菩薩ノ利益、他ニ勝レ給ヘリ。地蔵講ニ一両度参レル女ノ苦ニ代リ給フ事、既ニ如此シ。況ヤ、心ヲ至テ念ジ奉リ、其ノ形像ヲ造リ畫キ奉レラム人ヲ助ケ給ハム事ヲ思ヒ遣テ、世ノ人、皆、地蔵菩薩ヲ帰依シ可奉シトナム語リ傳ヘタルトヤ。」と記し、地蔵代受苦の功徳をあげている[19]。

これらの説話について、久保氏は、この説話文学の世界は貴族世界よりも下層の人々＝民衆の世界をこそ写し出しており、「民衆にとって地獄とは観念であると同時に現実、幻影であると同時に実相」であり、「民衆にとってまたれるのは救いであった。そしてそれに応えようとしたのが聖・沙弥と呼ばれる人々であり、修験者であり、彼らの説く法華経への信仰であり、悪趣抜苦代苦の地獄信仰であり、また観音信仰であった。」と述べている[20]。

ここまで見てきたように、12世紀前半までは、立山信仰の中心は観音信仰や地蔵信仰が中心であったが、次第に阿弥陀信仰へと変化していく。立山の開山縁起を記した『伊呂波字類抄』十巻本には、

「立山大菩薩」

顕給本縁起、越中守佐伯有若之宿祢、仲春上旬之比為鷹猟之、登雪高山之間、鷹飛空失畢、爲尋求之、深山之次、熊見射煞、然間、笑立乍登於蒿山、笑立熊金色阿弥陀如来也[21]

と記され、立山の開山者（ここでは佐伯有若）が鷹狩りの途中で鷹を失い、鷹と熊を探し求めて立山の山中に入り、金色の阿弥陀如来に出会ったことが記されている。このことについて米原寛氏は、「平安中後期に末法思想により堕地獄の恐怖が強まる中、阿弥陀如来の功力にすがろうとする傾向が強まり、それとともに熊野では本宮の聖性が阿弥陀として強調され、立山もその影響で弥陀中心の信仰に転じた」と考えている。そしてその時期は、「『熊野権現垂迹縁起』の成立を伝える『長寛勘文』の長寛（1163）元年以降、十巻本『伊呂波字類抄』が成立した鎌倉時代初頭」には「地蔵信仰と阿弥陀信仰の二重構造」がみられるようになったとしている[22]。『伊呂波字類抄』十巻本の成立時期については、鎌倉時代初期とする意見と室町時代初期とする意見とがあるが、いずれにせよ、中世前半頃に、立山は観音・地蔵信仰よりも阿弥陀信仰が優位を占めるようになったと考えられる。

また、由谷裕哉氏も、『本朝法華験記』（鎮源著、長久年間〔1040～1044〕成立）や『今昔物語集』に収録されている立山地獄説を詳細に分析し、「『今昔物語集』が成立した12世紀前半の段階では、巻十七第二十七語に見られるように、末法の菩薩としての地蔵の代受苦を説くにとどまっていた立山の周辺に、中世前半頃には阿弥陀による西方往生を説く本来の（天台）浄土教的な環境が確立してきたことを示唆している。」と述べている[23]。

１－４．地蔵信仰と阿弥陀信仰の併修

ところで、地蔵菩薩と阿弥陀如来の両方を信仰する形態が、『今昔物語集』巻第十七にいくつも見られる。

たとえば、『今昔』巻十七「紀用方、仕地蔵菩薩蒙利益語第二」には、尾張の前司入道の家の者紀用方は、武勇に優れる一方善心は無かったが、ある時、道心を起こし、地蔵菩薩に帰依し、また、日夜阿弥陀の念仏

を唱えた。あるとき、阿弥陀聖の夢に金色の地蔵菩薩が現れ、明日の暁に小路で出会う人が地蔵菩薩であると告げられる。翌朝、聖は小路に行き、用方を見て「地蔵菩薩にお会いできた」と涙を流して喜んだ。これを聞いた用方は驚いて「私は極悪・邪見の者だ」と否定したが、ますます堅固に道心を興して地蔵菩薩を帰依し、後に出家した。出家から十年余り経た後、病にかかったが、苦しむことなく、西に向かって念仏を唱え、地蔵の名号を念じて息絶えたという[24]。

また、『今昔』巻十七「依地蔵助活人、造六地蔵語第二十三」には、周防国一宮の宮司玉祖惟高は、神社の司の子孫でありながら三宝に帰依し、日夜地蔵菩薩を念じていた。惟高は六地蔵を造り堂を建て、道俗男女を集めて結縁した。惟高は七十歳余りで入道出家し、命終わる時、口に弥陀の宝号を唱え、心に地蔵の本誓を念じて、西に向かって端坐して失せたという[25]。このように、臨終にあたり、阿弥陀の名を念じる阿弥陀信仰と、地蔵の本誓を念じる地蔵信仰の併修がみられるようになった。

１－５．地蔵信仰の布教者

それでは、なぜ地蔵信仰と阿弥陀信仰の併修が行われるのか。それは、地蔵信仰の布教者が深く関わっていると考えられる。

速水侑氏は地蔵説話に阿弥陀浄土往生が数多く出てくることについて、「『地蔵菩薩霊験記』や『今昔物語集』の地蔵説話に、横川の浄土教家の活動が多数描かれていることと関係する」と指摘している[26]。横川は、古くは円仁が浄業と学徳による仏教集団を形成しようとして開いた地で、10世紀から11世紀には、比叡山の中でもことに浄土教の聖地の観を呈した。先に挙げた『今昔』巻十七第二十三語では、参河入道寂照が玉祖惟高の往生を夢に見て人びとに告げたが、寂照は慶滋保胤の弟子で横川浄土教と終始密接な関係にあった人である。また、同二十七語で地蔵法会の講師を務めたのは大原の浄源であるが、大原は平安末期に発達した天台浄土教の中心地である。これら地蔵説話成立の背景には、おそらく横川を中心とする天台浄土教家の影響が強いことを示している。『霊験記』『今昔』に地蔵と阿弥陀の併修が多いのは、こうした横川浄土教家を背景とした説話と考えれば容易に理解できると、速水氏は述べている[27]。

また、『今昔』巻十七「僧仁康、祈念地蔵遁疫癘難語第十」は、当時有名であった京都の祇陀林寺の地蔵講の由来を語った話である。治安３年（1023）四月に京都で疫病が大流行して多数の死者が出た。この時、仁康（横川の慈恵大僧正の弟子）の夢に地蔵菩薩が現れて、「近ハ五濁ニ迷フ輩ヲ救ヒ、遠ハ三途ニ苦ブ者ヲ訪ハムト」告げた。仁康は道心をおこし、半金色の地蔵菩薩像を造らせ、地蔵講を行うと、道俗・男女が掌を合わせて結縁した。すると、「其ノ寺ノ内并ニ仁康ガ房ノ内ニ、更ニ、疫癘ノ難无シ。」ということがおこった。そして、仁康が八十歳になり、命を終えるとき、「西ニ向テ直ク居テ、阿弥陀佛并ニ地蔵菩薩ノ名号ヲ唱テ、眠ルガ如クシテ失セニケリ。」と。世の人びとは「二世ノ利益地蔵菩薩ノ誓ニ過タルハ无シ。」と語り伝えたという[28]。ここから、地蔵菩薩は疫癘消除に大きなご利益をもたらす菩薩であると人々が信じていたことがわかる。

田中久夫氏は、こよのうな地蔵信仰の布教者が修験道の人々、特に、伯耆大山の人々ではないかと指摘している[29]。伯耆大山が地蔵信仰の一つの中心地であることは「伯耆国大山寺縁起」（『続群書類従』第二十八輯上、釈家部所収、室町時代初期成立）に記載されている。「今はたゝ地蔵菩薩の済度利生（衆生を救うこと）の勝給へる中に。伯耆国大山権現の垂跡しましまして。御山のふしぎを顕し。」と記されている。地蔵信仰の山である伯耆大山は、また一方では、修験道の山であった。先にあげた「伯耆国大山寺縁起」第二段で、「昔、伊弉諾、伊弉册のそのかみ兜率天たつみの角より化して、一の磐石おちくだるに。三に別れて一は熊野山。二は金峯山。三はこの大山とぞなりにける。このゆえに当山をば日本第三の石迹と申とかや。」と、熊野山、金峯山と並ぶ存在であることを主張している。平安時代には伯耆大山は修験道の一中心地であり、「修験道の山に地蔵一尊の信仰があった」のである。また、先に見た『今昔』巻十七語第二十七に出てくる延好も、修行の場が立山であることから、立山の修験者の一人であると考えられる[30]。全国各地で修行する修

験者が、延命や疫病消除などの現世利益をかなえるとして、地蔵信仰を布教したと考えられる。

また、地蔵信仰と阿弥陀信仰の併修は、真言宗でもみられる。弘安６年（1283）年に成立した『沙石集』（無住）巻第二「（五）地蔵看病給事」には、「我身ニハ、密教ノ肝心ヲ傳ヘテ、弥陀ト地蔵ト一體ノ習ヲ知リ。然バ大乗ノ法ニアヘルシルシニ、地蔵菩薩ニ隨逐シ奉リテ、光明眞言誦シテ、地獄ノ衆生ヲ加持セント思フ也。」[31] と記し、阿弥陀如来と地蔵菩薩が一体であると説いている。

こうした阿弥陀信仰を真言宗に取り込んだのは、高野聖といわれた人々であった。高野聖は、末法の世にあって、空海入定の地で弥勒下生の場と信じられた高野山奥の院へ死者の納骨を勧めて歩く聖であった。阿弥陀仏の念仏を唱えて西方極楽浄土に往生し、そこで56億7000万年待ち、弥勒菩薩の下生の暁の法華経の説法を聞き、悟りを開こうというものであった。本来ならば、高野聖は地蔵信仰との関わりを持つことはなかったが、関東を中心とする地方では、すでに平安時代の半ば頃までに地蔵信仰が平氏を中心とする豪族たちの間に見られたため、高野聖もその信仰を広めるためには地蔵信仰を利用せざるを得なかったのである。真言宗寺院である京都太秦の広隆寺講堂の本尊は阿弥陀如来で、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩を脇侍としており、虚空蔵菩薩と地蔵菩薩は対偶仏（一対の仏）と考えていた。真言宗では阿弥陀と地蔵を結びつける下地があったと田中氏は推測している。

また、浄土教が広く信仰されるようになった11世紀終わり頃に、聖徳太子とゆかりの深い四天王寺の西門が極楽の東門であるという信仰が生まれ、脚光を浴びてきた。その理由の一つは、観無量寿経に書かれる極楽の世界と四天王寺の風景が合致したからであり、人々は難波の海の向こうの六甲山に沈む夕日に阿弥陀如来の姿を見たのであった。『梁塵秘抄』（後白河法皇撰、1179年成立）巻第二に、「極楽浄土の東門は、難波の海にぞ対へたる、転法輪所の西門に、念仏する人参れとて」と歌われているのを見ることができる。こうして、平安時代末期に、真言系の高野聖の積極的な布教活動によって四天王寺経由の高野詣が盛んとなり、地蔵信仰と阿弥陀信仰が並立する形で各地に広まっていった[32]。

地蔵信仰は天台浄土教系の人々、伯耆大山をはじめとする修験の人々、そして高野聖をはじめとする真言系の人々によって全国に広められ、それが立山にも及んだと考えられる。

１－６．阿弥陀如来と地蔵如来の役割

平安時代末期までに、天台系、修験系、真言系の布教者により、地蔵信仰は立山の地にも広まり、さらに、鎌倉時代には阿弥陀信仰と地蔵信仰の併修が見られるようになったと考えられる。そこで問題となるのは、両信仰の関係であるが、このことについて、田中久夫氏は、先にあげた『今昔』巻十七「僧仁康、祈念地蔵遁疫癘難語第十」より、「どこまでも魂の救済者は西方浄土の主である阿弥陀如来であり、地蔵は疫癘消除の菩薩として利用されているにすぎないらしい」との見解を記している[33]。

一方、久保尚文氏は、「阿弥陀仏は彼岸である浄土に常在するのであって、ただ臨終に際してだけ来迎するのであるが、地蔵菩薩は地獄におつべき衆生を身を以て救済する」のであり、「阿弥陀の本願によって極楽往生を説く浄土教に比べて、地蔵による地獄よりの救済」の方が、「現世利益的側面を観ぜしめ、地蔵信仰の普及に寄与することになった」と考えている。さらに「浄土教布教者は阿弥陀信仰的往生思想を補完するものとして地蔵信仰を吸収利用したのである。したがってそこでは、地蔵の名号を念じて堕地獄から救われ、阿弥陀仏を念じて極楽に往生するというような二重構造をもつ地蔵－阿弥陀信仰が説かれるに至ったのである。」と述べている[34]。

『今昔物語集』巻第十七の地蔵説話の主人公は多くが地方の武士や神官で、京を舞台とした説話でも庶民が登場し貴族社会とは無縁である。これは、末法の世にあって、極楽往生するには造寺・造仏・写経・誦経などの作善が必要であるが、それを行うことができるのは藤原道長・頼通のように経済力のある特別な人々のみであり、大勢の人々は浄土教の世界にあっても見捨てられた存在であり、地獄に堕ちなければならなかったのである。そこで、地獄の苦しみからの救済を地蔵菩薩に願うことになったのである。地蔵菩薩は、六

道抜苦の仏として、さらに疫病消除などの現世利益をかなえる仏として、広く庶民に信仰されるようになった。一方、阿弥陀如来は、六道輪廻に苦しむ衆生を、自らの住む極楽浄土へ導く仏である。両者の関係について、米原氏は、「平安時代の末期から鎌倉時代初頭にかけては、立山はまだ地蔵菩薩が衆生の救済者として現れるものと考えられていたが、やがて地蔵信仰に加えて新たに阿弥陀信仰が入り込み、次いでこれまでの死後供養と滅罪にあった地蔵信仰とともに、さらに阿弥陀を念じて極楽に往生を願うという地蔵信仰と阿弥陀信仰の二重構造がみられたのである。」との見解を記している[35]。『今昔物語集』が成立した12世紀前半頃には、末法の菩薩として地蔵の代受苦を説くに止まっていた立山の周辺では、末法思想の影響を受け、13世紀初頭頃には阿弥陀による西方往生を説く一方、地蔵には六道抜苦と現世利益の功徳があると説く補完的・重層的関係が見られるようになったと考えられる。

2．芦峅寺における地蔵信仰

2－1．芦峅寺の地蔵菩薩像・六地蔵像

ここまで、古代・中世の説話物語に記された地蔵信仰を見てきた。次に、立山山麓で立山信仰の拠点となった芦峅寺における地蔵信仰の様相を見ていきたい。

『延命地蔵経』（平安末期に日本で撰述）には、地蔵菩薩は衆生を救うため、毎朝禅定に入り、六道の世界に身を現して衆生の苦しみを除き楽を与えると説かれている。そして地蔵の十種の福が記される。

一、女性の安産
二、身体健康
三、病気平癒
四、寿命が延びる
五、聡明な智恵を得る
六、財宝にあふれる
七、人々に好かれる
八、五穀豊穣
九、神々に守護される
十、悟りを得る

さらに、「六道の衆生を救い、もし重い苦しみを受ける衆生があるならば、私が代わってその苦しみを受けよう。そうでなければ成仏することはない」という「代受苦」の誓願が説かれている。この経典は地獄救済、十種福徳、代受苦が説かれる比較的短い経典ということもあり、民間に流行して地蔵菩薩信仰を支える大きな要因となった[36]。また、『梁塵秘抄』（後白河法皇編）には「毎日恒沙（ガンジス川の砂で、無数の意）の定に入り　三途の扉（とぼそ）を押し開き　猛火（みょうか）の炎をかき分けて　地蔵薩埵（菩薩）こそ訪（と）ふたまへ」とあって、平安時代末期には地獄の救済者として地蔵信仰が定着したと推定される[37]。さらに、地蔵は地獄に堕ちた衆生の済度に当たってくれるだけでなく、境において衆生を救済してくれる存在とも考えられるようになった。そうして、現実の世界の境、村境や町境に立って、外部からやってくる災厄を防いでくれる境界神（仏）へと発展していった。

また、11世紀のはじめに、当時盛んだった六観音信仰に刺激されて、六地蔵信仰が発生したと考えられている。先にも紹介した『今昔物語集』巻十七「依地蔵助活人、造六地蔵語第二十三」には、周防一宮の宮司玉祖惟高が病死して冥途に行く途中、六地蔵に合い蘇生した話が記されている。現在でも、各地の墓地・火葬場の入口に六地蔵が安置されているが、これは地蔵の六道救済にちなんだ信仰である。さらに、中世から近世に京都や江戸では、市街地の入口や要地に当たる地点六か所を選んで地蔵を祀り、それらを順に参拝す

る風習が生まれた。十四世紀後半には、京都で上善寺や徳林庵などをめぐる京都洛外六地蔵巡りが始まり、江戸時代の寛文年間（1611～1673）以降に今日行われている形態に整えられた。江戸では元禄４年（1691）には駒込瑞泰寺などを巡る「最初建立江戸六地蔵」が設定され、人々の間で六地蔵巡りが盛んになった[38]。やがて、地蔵菩薩は〈お地蔵さん〉と親しみを込めて人々に呼ばれ、全国各地で路傍や墓地の入口などに石仏などが祀られるようになった。

地蔵信仰が庶民に広まる中で、立山にも地蔵信仰が浸透した。芦峅寺の媚谷川は「この世とあの世の境」とされ、「六道能化」や先祖供養のため、あるいは安産や病気平癒、寿命長大などの「現世利益」をかなえるために、数多くの地蔵菩薩像が造像・寄進された。

２－２．小矢部市観音寺銅造地蔵菩薩半跏坐像

現在、富山県小矢部市観音町の観音寺（真言宗）の前庭に銅造地蔵菩薩半跏坐像が安置されている（写真１）。この像は「延命地蔵」と呼ばれ、左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、左足は踏み下げにしている[39]。江戸時代までは芦峅寺閻魔堂の前庭に安置されていたものである。明治初年の神仏分離令にもとづく廃仏毀釈の影響で、まず小矢部市倶利伽羅の長楽寺へ移され、さらに明治５年（1873）に観音寺に移された[40]。この像は、背面やその蓮華座蓮弁などに多くの刻銘がある。その主な内容は、

写真１　銅造地蔵菩薩半跏坐像
（小矢部市観音寺）

信州松本町　立山講中
願主　教蔵坊照界　立之
請負　松本飯田町　薬鑵屋佐原市右衛門尉正孝
旹時　文政八年乙酉七月吉祥日
御鋳物師大工職　信濃國上田住　小嶋大治郎　藤原弘孝　謹制[41]

これによると、芦峅寺教蔵坊の衆徒照界が願主となり、文政８年（1825）７月に信州松本町立山講中から寄進されたものであることがわかる。寄進者の所在地は、現在の新潟県糸魚川市から、長野県大町市や松本市、安曇野市などにまたがる約142村で、俗名で1221名、戒名で1458人の合わせて2679名もの寄進者の名前が刻み込まれている。その分布は千国街道に沿っており、概ね教蔵坊の檀家の分布状況と合致している[42]。銘文中の「立山講」は、立山信仰の講社ではなく、木綿業者の経済団体である。松本は当時、足袋の産地で、越中の新川木綿をたくさん買い入れ、それを足袋に加工して、江戸などへ出していた。薬鑵屋市右衛門など松本の巨商たちが世話人となり、寄進を集めたと思われる[43]。寄進の目的は、一つには、先祖・家族の供養、特に女性の戒名が多いことから女性が堕ちるとされた血の池地獄からの救済、さらに名称の通り延命長寿なども考えられる。

また、逆に、寄進を受けた教蔵坊から、寄進した信州細野村の平林徳左衛門に宛てた證印も残っている。

「営鋳地蔵尊　支證　立山教蔵坊　金像地蔵尊施財稟」
　金像地蔵尊施財稟
夫当山諸仏瑞集之梵崛衆生済度之霊地也爰奉新営鋳地蔵菩薩施財所志聖霊安置此密場永劫毎日備六種之妙供修三密之観行亦盂蘭盆会都婆造立之迫福廻向等至于龍華之暁奥退転然以大悲地蔵菩薩願力与秘密神変修力故所志亡霊速極楽往生当来慈尊出世説時必可為菩薩聖衆無疑矣
郭室智聖大姉
郭然無聖居士
荷林玉葉童女
如参智劫童女

文政八乙酉年

立山

教蔵坊（角印）

信州細野村

平林徳左衛門殿 (44)

「細野村　平林徳左衛門」の名前は、「小矢部市観音寺銅造地蔵菩薩半跏坐像」の敷茄子にも記されている (45)。

２－３．永平寺所蔵銅造地蔵菩薩半跏坐像

曹洞宗総本山永平寺（福井県吉田郡永平寺町）の承陽殿近くに安置されている銅造地蔵菩薩半跏坐像（像高195.0cm）は、寛政元年（1789）に信州の檀那が芦峅寺教蔵坊へ寄進したものである。元は芦峅寺媚堂前に祀られていたが、この像も、廃仏毀釈の影響で永平寺に移された。この地蔵像とともに寄進された銅造聖観世音菩薩坐像（像高200.0cm）は、同じく曹洞宗の大本山祖院総持寺（石川県輪島市）に安置されている (46)。像の蓮弁に寄進者の名前が刻まれ、そのうちの一枚に「願主　立山芦峅寺　教蔵坊、施主　信州筑摩郡　松本」、鋳造は「刺（ママ）許　御鋳物師　松本住　濱　石見大據（ママ）　藤原清綱治」とある。先ほどあげた長野県松川村の平林家には、もう１通教蔵坊が発行した証印が残っており、ここに記された寛政元年に寄進された地蔵菩薩像は、永平寺に現存する尊体と推測される (47)。

観音地蔵二尊建立證印

夫當山御媚尊ト者諸佛瑞集之梵崛一切衆生
生死之母タリ然ルニ始従天降リ給時右ノ御手ニハ五穀ヲ納
左ノ御手ニハ麻ノ種ヲ執持シ一切衆生ニ與之給依生長ス爰ニ
御脇立建立地蔵大菩薩天福皆来地福圓満本有ノ
觀世音菩薩
薩埵也今世ニハ壽命長遠子孫繁昌守護給
来世ニハ五逆重罪ヲ滅シ則心成佛無疑者也衣テ
於御寶前ニ日日献六種之妙供ヲ施建之戒名俗
名ヲ記置永代廻向令祈勤者也仍テ寄進狀如件

立山願主

寛政元己酉歳　　教藏坊

（中略）

先祖代々菩提　平林勘之丞殿 (48)

２－４．芦峅寺閻魔堂前の六地蔵

芦峅寺にある閻魔堂の前庭コンクリート壇には、数多くの石造仏が安置されている。その最上部に、浮き彫りの聖観音菩薩像一躰とともに、地蔵菩薩像六躰が立ち並んでいる（写真２）。この六地蔵は、もとは芦峅寺媚堂境内に安置されていたが、こちらも廃仏毀釈の影響を受け、閻魔堂前に移された。富山県[立山博物館]では、1990年から1992年にかけて、芦峅寺の閻魔堂周辺や布橋、媚堂基壇横の墓地内などの石造仏について悉皆調査した (49)。なお、これらの像は調査時点ではD-30、E-54・56・60・61・62として二地点に別れて確認

写真２　芦峅寺閻魔堂前六地蔵

されていたが、調査以後に、六体が整然と並べられた[50]。また、これらの六地蔵像に関し、芦峅寺雄山神社所蔵の古文書群の中に、嘉永６年（1853）に芦峅寺宝泉坊の衆徒泰音が記した『媼堂境内六地蔵尊石像造営施主等覚帳』と題する長帳が残っている。そこには、寄進者名や住所、寄進年次・寄進目的、祠堂金額などが克明に記されている。これによると、六地蔵像各個体における①寄進者名、②寄進者住所、③寄進年次、④寄進目的、⑤祠堂金額は次の通りである[51]。

Ａ地蔵菩薩石像
①大沢相模守の妻
②愛宕下田村小路
③嘉永６年（1853）
④追善供養
⑤１両２分

Ｂ地蔵菩薩石像
①長沢屋由松
②本船町
③嘉永７年（1854）３月
④家内安全、子孫繁栄
⑤１両２分

Ｃ地蔵菩薩石像
①松平右近将監（京極備中守）家臣大橋養運の妻志ん
②不明
③安政４年（1857）５月
④先祖代々の供養（追善供養）
⑤１両２分

Ｄ地蔵菩薩石像
①牧野定次郎の娘郷
②数寄屋橋御門外
③安政４年（1857）５月
④先祖代々の供養（追善供養）
⑤１両２分２朱

Ｅ地蔵菩薩石像
①小林正利
②下谷中御徒町
③安政５年（1858）３月
④追善供養
⑤２両

Ｆ地蔵菩薩石像
①小宮山鐐助　藤原義路　小宮山錦照院
②牛込土手四番町
③安政５年（1858）
④追善供養
⑤２両

以上の内容を整理すると、寄進者のうち５名は、江戸で廻檀活動を行っていた芦峅寺宝泉坊の檀那帳に信

徒として記載されていた。そのうち大沢相模守の本名は大沢主馬で、江戸幕府の旗本で禄高は856石であった。また、長沢屋由松は、宝泉坊が江戸の檀那場において最も頼りにしていた信徒で、問屋業を営んでいた。大橋養運は松平右近将監（京極高景、峰山藩主一万一千石）の家臣で、「志ん」は三河西尾藩主松平和泉守に女中として奉公していた。小宮山鐐助は宝泉坊の檀那帳に記載され、安政５年で20歳だという。小宮山家は江戸幕府旗本で禄高は400石であった。

これらの地蔵寄進の経緯をみると、寄進者の戸主は宝泉坊の檀那で、江戸の信徒のなかでも、立山信仰の講組織を中心となって支えていた大名の家臣や旗本、中流商人などであった。寄進された金額は総額10両２朱であるが、制作実費は５両１分２朱263文で、４両２分３朱149文が宝泉坊の手元に残った。なお、地蔵像の製作は、富山藩領新川郡善名村立野の石工・中嶋栄蔵が手がけており、材料の荒取石を芦峅寺媚谷川から採取し、媚堂近くの仁王門まで運んで作業を行った[52]。

寄進者のうち３人が女性であるのは、芦峅寺の衆徒が、立山は全国的に見ても数少ない女人往生の霊場であることを喧伝し、女人救済の護符や布橋灌頂会の血脈、血盆経などを頒布したり、布橋灌頂会への参加を勧誘したことにより感化を受けた女性が地蔵菩薩像の寄進を発願したと考えられる[53]。寄進目的は、大半が祖先に対する追善供養のためであるが、家内安全・子孫繁栄などの現世利益を目的としている場合も見受けられる。子孫繁栄が願われているのは、『延命地蔵経』に説かれた地蔵十福の第一に「女人泰産」とあることから、地蔵信仰が江戸時代に安産や幼児の守護など、子供に縁の深いものとなっていったことが影響していると考えられる[54]。

次に、この六地蔵の名称であるが、『仏説地蔵菩薩発心因縁十王経』の記述と閻魔堂前庭の六地蔵像の持物・手印を照らし合わせていくと、次のようになる[55]。（閻魔堂コンクリート壇の向かって右から）

①「放光王地蔵」左手に錫杖、右手は欠損（手のひらを前に向けて下に下げていれば与願印）。雨雨五穀を成す〔人道〕。

②「金剛幢地蔵」左手に金剛幢、右手は施無畏印（一切の衆生に安心を与えること）。修羅を化す摩幡なり〔修羅道〕。

③「金剛悲地蔵」左手に錫杖、右手は引摂印（極楽に導き入れること）。傍生諸界を利す〔畜生道〕。（聖観音像をはさんで）

④「金剛宝地蔵」左手に宝珠、右手は甘露印（苦悩を取り除き、長寿を与え、死者をよみがえらせる甘みの霊液をいう）。餓鬼に施し飽満せしむ〔餓鬼道〕。

⑤「金剛願地蔵」左手に閻魔幢、右手は成弁印（ものごとの道理をわきまえ、あやまりなく判断すること）。地獄に入り生を救う〔地獄道〕。

⑥「預天賀地蔵」左手に宝珠（『十王経』では錫杖）、右手は施無畏印。天人衆を利楽す〔天道〕。（なお、地蔵像の持物は経典によって異なる。）

２－５．明念坂の地蔵菩薩像

芦峅寺閻魔堂から布橋へと下っていく明念坂には、数多くの地蔵菩薩・観音菩薩などの石造物が安置されている。その坂の下部の閻魔堂側に６体の石造地蔵菩薩像（像高93～127cm）（『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』D-８～D-13）が安置されている（写真３）。これらは「権大僧都法印」の菩提を弔うため、貞享２年（1685）７月に、金泉坊を願主として造られたものである。

写真３　明念坂六地蔵

また、明念坂上部閻魔堂側には九躰の小さな地蔵菩薩像（像高48～61cm）（『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』D-42～

D-50）が並んでいる。これらは、制作年はわからないが、先祖供養のために造られたもので、願主は地元の立山村が５体、大山村が２体、富山１体、不明１体である[56]。

２－６．布橋東詰の磨崖仏（六地蔵）

布橋東詰には、角礫凝灰岩の自然石に彫り出した六地蔵の磨崖仏がある[57]（写真４）。従来、「中世」の制作とされていたが、古川知明氏の調査により刻銘の存在が確認され、「弘化元年（1844）」の制作である可能性が出てきた。石工は不明である。旧布橋東詰にあったと言われており、旧布橋の位置を推定する手がかりとなりうる[58]。

写真４　芦峅寺共同墓地磨崖仏（六地蔵）

２－７．芦峅寺共同墓地の地蔵菩薩像

布橋東側の芦峅寺共同墓地には、それぞれの家の墓に、数多くの地蔵菩薩像が安置されている。

中でも、相栄坊墓地の嘉永５年（1852）の地蔵菩薩像は、台座に江戸城大奥女中八重嶋が寄進した旨の刻銘がある。石工は善名村の北野甚蔵である[59]。八重嶋は、江戸城西之丸付きで、十三代将軍家定の上臈御年寄で、嘉永５年になくなった。病気で自分の死期が間近であることを悟った八重嶋が、死後、自分が万が一「地獄」や「餓鬼」の苦界に堕ちた場合の救済を願って、信珠院という女性に託して、地獄信仰で著名な立山に寄進したものである。八重嶋の石仏寄進が相栄坊との師檀関係によるものか、あるいは一時的なものかは判断できないが、いずれにしても八重嶋が「地獄・極楽信仰」や「女人救済信仰」に特色がある立山信仰に何らかの思いを寄せていとことは確実である[60]。

おわりに

ここまで、立山における地蔵信仰の実態について、経典や説話文学、芦峅寺に残る地蔵菩薩像を中心に見てきた。

地蔵菩薩は、六道悪趣の衆生を救済し、現世利益をかなえる仏として、鎌倉時代以降、庶民の間に広まっていった。立山信仰においては、平安時代末期ごろは観音菩薩や地蔵菩薩が立山地獄に堕ちた衆生を救済すると考えられていたが、やがて鎌倉時代にかけて、新たに阿弥陀信仰が入り込み、阿弥陀如来を念じて極楽往生を願う阿弥陀信仰が優位となった。しかし、地蔵信仰や観音信仰も継続され、「立山曼荼羅」に描かれ、また、芦峅寺集落に数多くの六地蔵が祀られて、人々の信仰を集めたことを紹介した。

今回は「立山曼荼羅」に描かれている「賽の河原の地蔵」については触れることができなかった。また、立山山中の地獄谷や賽の河原に分布する地蔵菩薩像や石造物についても検討することが、立山における地蔵信仰の位置づけを考えていく上では必要であると考える。これらのことは今後の課題である。

［註］

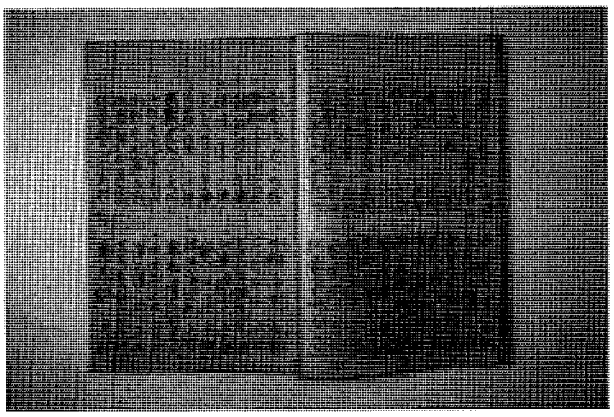
（１）木倉豊信『越中立山古文書』芦峅寺文書四（国書刊行会、1982年）２頁。

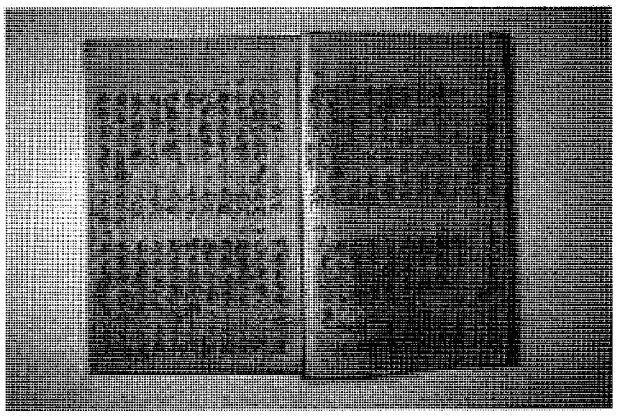
（２）久保尚文『越中中世史の研究』（桂書房、1983年）175頁。

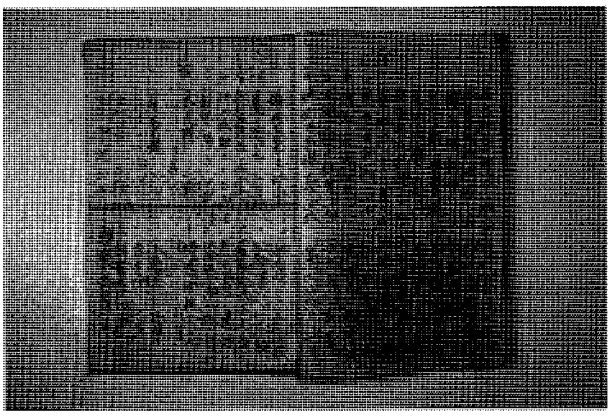
（３）高達奈緒美「立山信仰と文芸－立山地獄説話を中心として－」（『国文学　解釈と鑑賞』第58巻３号所収、至文堂、1993年）143頁。

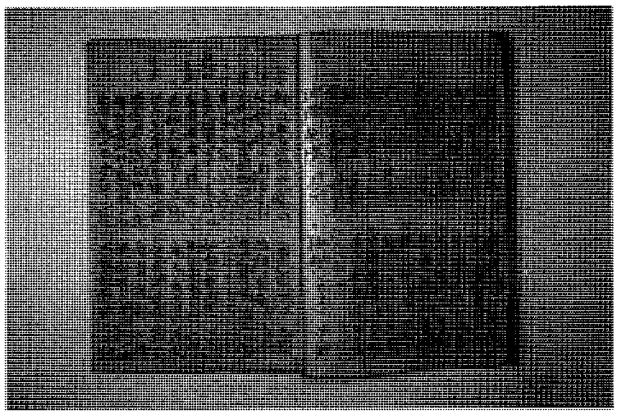
（4）米原寛「立山にみる救済の論理」（『富山史壇』第176号所収、2015年）７頁～８頁。
（5）下泉全暁『地蔵菩薩－地獄を救う路傍のほとけ－』（春秋社、2015年）４頁～５頁。
（6）速水侑『地蔵信仰』（はなわ新書、1975年）19頁。
（7）速水　前掲書20頁。
（8）速水　前掲書36頁。
（9）下泉　前掲書52頁。
(10) 下泉　前掲書53頁。
(11) 下泉　前掲書66頁。
(12) 速水　前掲書46頁、76頁。
(13) 速水　前掲書77頁。
(14) 速水　前掲書78頁。
(15) 速水　前掲書85頁～87頁。
(16)『沙石集』（『日本古典文学大系85』、岩波書店、1966年）102頁～106頁。
(17)『今昔物語集　三』（『日本古典文学大系二十四』、岩波書店、1961年）287頁～289頁。
(18)『今昔物語集』前掲書所収、289～292頁。
(19)『今昔物語集』前掲書所収、541～542頁。
(20) 久保尚文『越中中世史の研究　室町・戦国時代』（桂書房、1983年）175頁。
(21)『研究紀要』第３号（富山県[立山博物館]、1996年）。
(22) 米原寛「立山に見る救済の論理」（『富山史壇』第176号所収、越中史壇会、2015年）７頁。
(23) 由谷裕哉『白山・立山の宗教文化』（岩田書院、2008年）118頁。
(24)『今昔物語集三』（『日本古典文学大系二十四』、岩波書店、1961年）505頁～507頁。
(25)『今昔物語集三』（『日本古典文学大系二十四』、岩波書店、1961年）534頁～535頁。
(26) 速水　前掲書89頁。
(27) 速水　前掲書90～94頁。
(28)『今昔物語集三』（『日本古典文学大系二十四』、岩波書店、1961）516頁。
(29) 田中久夫『地蔵信仰と民俗』［新装版］（岩田書院1995年）104頁。
(30) 田中　前掲書81～85頁。
(31)『沙石集』無住（『日本古典文学大系八十五』岩波書店、1966）102頁。
(32) 田中　前掲書127～140頁。
(33) 田中　前掲書98頁。
(34) 久保　前掲書178頁。
(35) 米原　前掲書７頁。
(36) 下泉　前掲書46～51頁。
(37) 渡浩一『お地蔵さんの世界－救いの説話・歴史・民俗－』（慶友社、2011年）15頁。
(38) 松崎憲三『地蔵と閻魔・奪衣婆』（慶友社、2012年）23頁～24頁、41頁。
(39) 平成18年度特別企画展「神像・仏像は語る」展示解説書（富山県[立山博物館]、1998年）。
(40) 福江充『近世立山信仰の展開』（岩田書院、2002年）147頁。
(41)『立山請来延命寺蔵銘小矢部市観音寺境内安置』（立山町史編纂室編、1972年）。
(42) 福江充『近世立山信仰の展開』（岩田書院、2002年）156頁。
(43)『立山町史』上巻（立山町、1977年）585頁。
(44) 個人所蔵、福江充「越中立山芦峅寺の由緒書・縁起・勧進記と木版立山登山案内図・立山曼荼羅」（『研究紀要』第19号富山県[立山博物館]、2012年）37頁。
(45)『立山請来延命寺蔵銘小矢部市観音寺境内安置』（立山町史編纂室編、1972年）。
(46) 平成18年度特別企画展「神像・仏像は語る」展示解説書（富山県[立山博物館]、1998年）。
(47)『立山町史』上巻（立山町、1977年）586頁。
(48)「観音地蔵二尊建立證印」（版木、寛政元年〔1789〕、富山県[立山博物館]所蔵）。
(49)『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』（富山県[立山博物館]、1993年）。

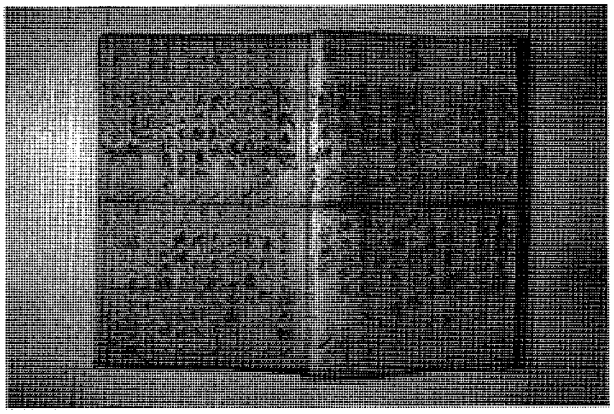
(50) 古川知明「常願寺川石工中嶋栄蔵について」(『富山史壇』第168号、2012年)。
(51) 福江　前掲書381頁～383頁。
(52) 福江　前掲書391頁。
(53) 福江　前掲書383頁。
(54) 真鍋広済「地蔵信仰の源流と地蔵菩薩」(『民衆宗教史叢書十　地蔵信仰』[POD版]桜井徳太郎編、雄山閣、2003年)。
(55) 速水　前掲書65～68頁。
(56)『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』(富山県[立山博物館]、1993年)。
(57)『立山中宮寺跡石造物分布調査報告書』B-292。
(58) 古川知明「芦峅寺の石造物を訪ねて」(平成27年度富山県[立山博物館]第五回教養講座)。
(59) 古川知明「常願寺川石工北野甚蔵について」(『大境』第32号、富山考古学会)。
(60) 福江充『江戸城大奥と立山信仰』(法藏館、2011年) 233～234頁。

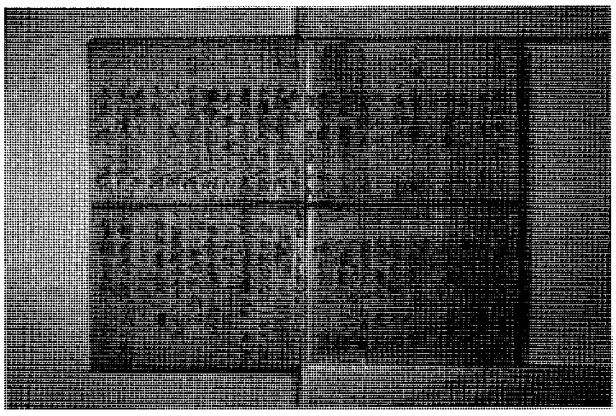


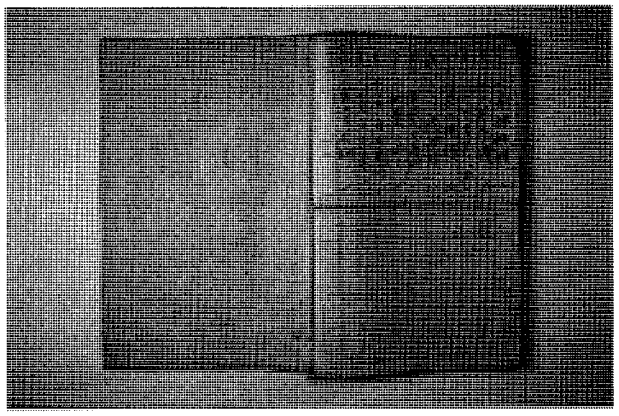


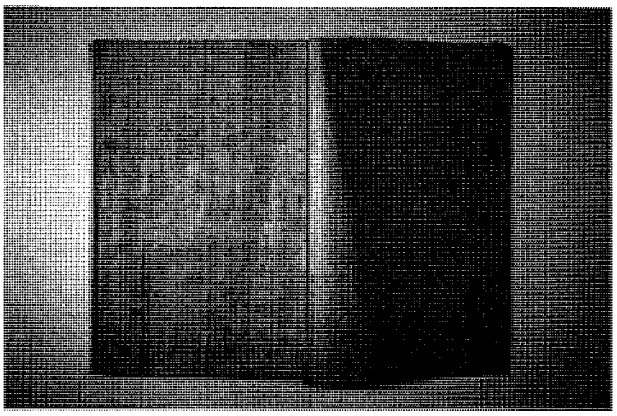


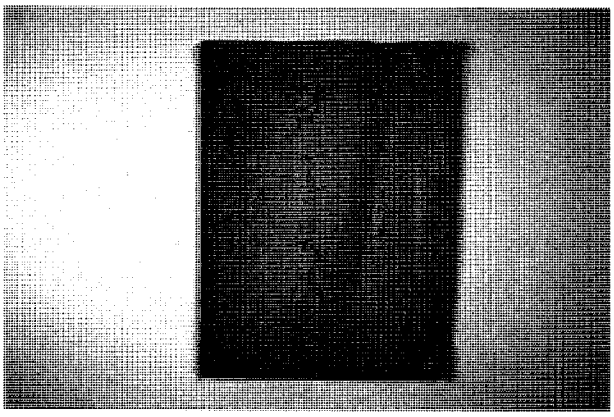


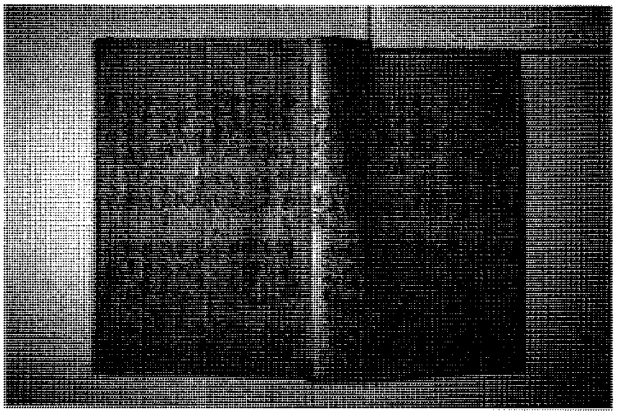


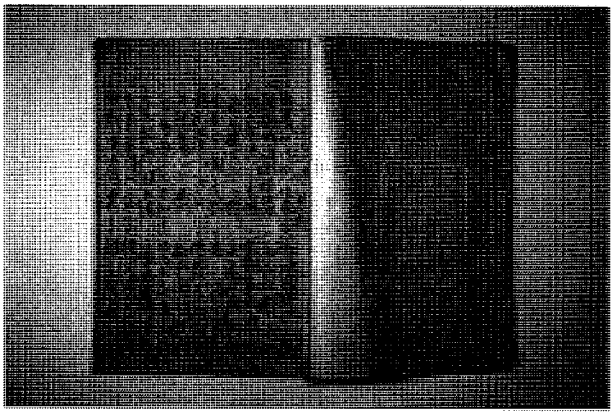


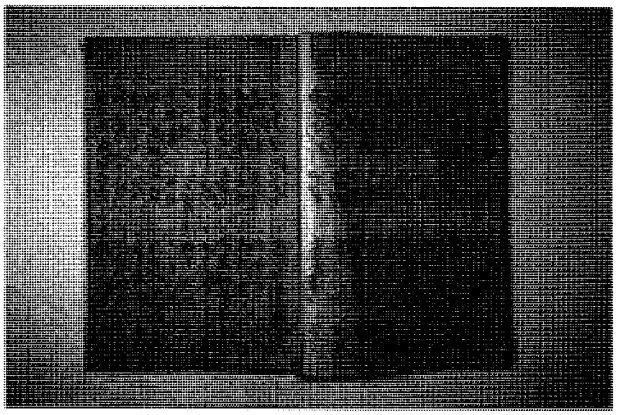


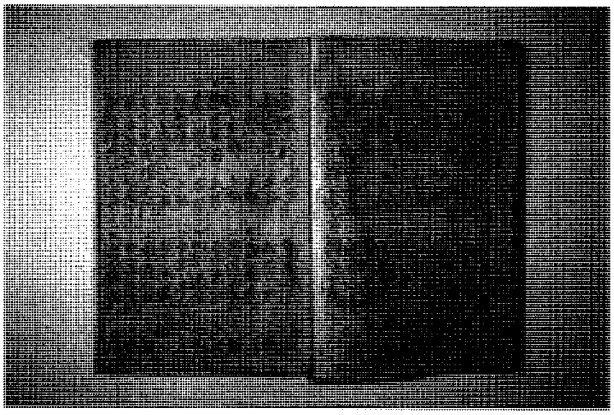


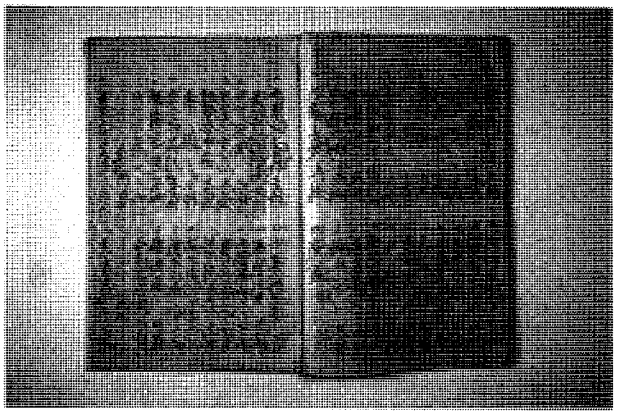


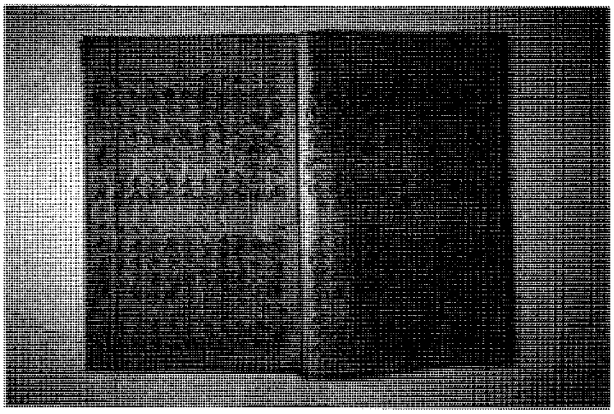












九年
千代野ヵ　一・竹足角床花台　一
　　一・黒ヌリ衣桁　一

十四丁裏

『諸道具調帳』は何度かに分けて書かれていることがわかる。十一丁表の一行目「〇木鋏上下三挺」までは朱で丸がついており、十一丁表の四行目「本はさみ　大小　二個」までは同じ書体で書かれている。表紙から考えると「本はさみ　大小　二個」までは、大正二年二月に調査され、記入されたものである。また、表紙裏に朱字で書かれている注意に「朱字ト〇印ノアルハ明治三十三年十一月現在品ニシテ其他ハ新調セシモノ」とあることから大正二年に調査された道具うち、朱字と丸印の道具は、明治三十三年十一月にあったもので、その他の道具は明治三十三年から大正二年二月までの間に新調されたものと考えられる。佐伯道範は、「有胤ノ舎弟トシテ明治三十三年十一月二十五日養子入籍ス」(1)となっている。

十一丁表の五行目「二年十月　古大簞笥　壱個」からの道具は記された年や月に購入され、追記されたと考えられる。

十三丁裏の七行目の「十四年　前桐箪笥一本」「〃　上薬飯茶はん十人」の後にインクで〆が入っている。インクの字が入るのはこれ以降の事である。道具の項目は墨で書かれていることから、インクは後から書かれたと考えられる。購入した年や月がわからず、あとでまとめて書いたものの年代が判明したのかもしれない。

十二丁裏からは一や・の印がついているものがある。

最後の項目にある「千代野」は道範の長男である善道の嫁である。二人の結婚が大正十三年である(2)ことから、『諸道具調帳』は少なくとも大正十三年までに増えた道具について記していたことがわかる。インクによる記述も昭和八年まであることから、それまでは道具帳としてつかわれていたのであろう。

三　まとめ

善道坊に伝わる『諸道具調帳』について、翻刻と簡単な解題を紹介した。

一丁裏にある「天保年間四十六代龍泰老僧諸道具調査帳ハ一部別ニ保留ス」は、立山博物館に収蔵されている『家諸道具覚帳』のことと思われる。『家諸道具覚帳』は、表紙に「天保十一子年三月吉祥日　竜泰代」とあり、天保十一年（一八四〇）から嘉永六年（一八五三）十月までに購入された道具が記されている史料である。十丁裏に「掛物ト書籍ハ別書ニ記入シテアル」と書かれているが、これに当てはまる書物は見つけられていない。

立山博物館に収蔵されている、国指定重要有形民俗文化財の『立山信仰用具』には、芦峅寺の宿坊家の諸道具が含まれており、その中には「善道坊」の名があるものもある。このことから、これらの道具と、『諸道具調帳』『家諸道具覚帳』の史料と見比べると、善道坊、そして芦峅寺の宿坊にどのような道具があったのかを知る手掛かりとなると思われる。

今回は、『諸道具調帳』について紹介するだけにとどまったが、明治期に立山信仰は急速に衰退していった。これらの史料を比べることで、芦峅寺の宿坊家の変遷が分かるのではないだろうか。

[註]

(1) 善道坊家等の系譜を記した『善道閑系譜記』による。『善道閑系譜記』は明治六年佐伯美那登によって書かれ、その後佐伯道範によって加筆、修正されたと考えられる史料である。

(2) 『善道閑系譜記』「善道配偶者千代野暉光ノ長女ニシテ大正十三年二月日結婚ス」による。

一けさ行李　一個
八年一月一金木華　一對
一花瓶大　一對
六月　一金鋺大　三個
〃　一尺二ノ盤子　一個
七月　楽太鼓　一個
障子桟赤塗　四枚
一十年　刷毛　三本
一十一年　手提金庫　一個
一〃　手提火入　一個
一〃　着布とん　一枚
一〃　栗木菓子器　一個
一〃　鋳物クド　一個
一〃　手提柳行李　一個
一〃　バスケット　一個
一〃　土瓶　二個
一〃　湯沸　一個
一〃　有田焼　二個
一〃　湯呑二種　五個

但シ押入用
十年　経机　壱個
〃　古木奥　一個
〃　土焼大火鉢　一個
〃　ツムキ座ふとん　五枚
〃　敷布とん　五枚
〃　四尺障子硝子入　二枚
十一　台燈篭（ママ）　一對
〃　拂子　一本

十二丁裏

〃年　上敷八丈　一枚
〃　ザシキ用　一本
箒
〃　上敷八丈　一枚
十一年　硝子入障子　四枚
十一年　古畳　六枚
〃　寒暖計　一本
〃　真鍮仏キ　二十個
〃　大幕　一張
十二年　無地上敷八丈　一枚
〃　金繍折敷大小　四枚

十三丁表

焼物色々ツタ藤
花サシ一本
十三年本尊前
戸帳　一張リ
〃　古ヅシ　一個
一．座敷用茶棚　一
一．花生ウスワタ　一
一．花台（貝入角形）　一
一．丸形雲盤　二

但シ仏入レ
十四年　前桐箪笥　一本
〃　上薬飯茶はん　十人
〃
一．三ツ重（子供用）ネダンス一本
一．前桐小ダンス　一
一．新形本棚　一
一．角形雲盤　一
一．樺天然形火鉢
一．瓶掛金丸火鉢　上　一
一．金火鉢　下　一
一．カラツ赤色丸火入六（昭二）
一．銀台二枚折　一（七年）
一．白無地　一（六年）

十三丁裏

一．方枚并風　一（外孫方）
一．小形金地二枚折一（自作）
一．小形四枚折　一
一．中形二枚折　一（〃）
一．額　鮎画　一（九年）
一．大形額愚痴　一（八年）
〃文字泥舟　一
一．硝子入林島（アザミ一（大正十五年）
一．肖像画　一（昭和八年）
一．寄書額　一（〃）
一．知事礼状額　一（古）
一．吉田先生自摺（ママ）画額　一（大正十三年）
一．藩札入額　小　一
一．国宝像入　一（六年）
一．両陛下御肖像入　一
一．大形本棚三尺ノ四尺　一（八年）
一．樺一枚板角机古　一（七年）
一．模様入カラツ火鉢　一（八年）
一．白地模様入火鉢　一（九年）
一．カゴ入丸形手アブリ　二（〃）
一．硝子入障子　四枚（五年買入）
一．〃　四（十年買入）

十四丁表

一．南部鉄瓶　一（五年）
一．丸形茶櫃　一（十年）
一．自用角形ヌリ机　一（八年）
一．長形掛鏡　二（八年）
一．目醒時計　二（八年）
一．應接（ママ）間用茶棚　一（九年）
一．銅製コボシ　一（六年）
一．四ツ足角盆栽台　一（七年）

板製諸状差　壱個
松盆栽　大小　五鉢
外ニ　二鉢
炬焼襟渕（見当違）　三個
硯箱　二個
炬焼ノ金ノザー　壱個
○梅干かめ　二個
酒ノじょごう　一ツ
客用新下駄　十足
○文銭等
経衣版　全部
掛物ト書籍ハ別書ニ記入シテアル
袖榴（ママ）提燈　壱ツ
○木鋏　上下　三挺
衣服掛ケ釘五本　一個
柱掛柾板（梅紋彫一枚
本はさみ　大小　二個
二年十月　古大簞笥　壱個
三年度　弓張提燈ノ箱　二個
更紗大座ふとん一枚
三年度　白木造書画入箱一個
仏前長旗（内野ヨリ）二旒
〃　檀家帳入小簞笥一個
〃　大見台　佛前用　一個

万年青鉢　壱鉢
南天鉢　壱鉢
十丁表
置床　壱個
廣田製
外ニ硯　二個アリ内壱ツ
○令木製　壱個
○胡麻（ママ）いり　壱個
○榴（ママ）鉢　大小　二個
あんか　壱個
○四角提燈　古　壱ツ
其他新調ノ版多シ
○紙断（マメノハ）壱挺
十丁裏
子供金庫（一ツ金一ツ木）　二個
掛軸風輪　二組
佛前長旗（真明寄附）　二旒
白木本箱　一個
并ニろうそく入一個
赤大重五ツ組箱入
白木祠堂帳入箱二個
白木衣桁　一個
佛前用二本足机一個
本尊両服ノ厨子二個
十一丁表

〃　古器物入古錦帳小箱一個
〃　名古屋特許硯箱　二個
〃　鐘鬼掛軸（静ム）　一本
〃　立山古木（権現堂）額一個
〃　立山曼陀羅入之箱　一個
〃　前庭用瓦斯燈　壱個
二年十月　真鍮大ろうそく立　二本
三年一月　黒塗中針箱　一個
五月　抹茶短冊（桐製）　一個
一月　二間ニ二間半板倉　一個
七月　佛前用赤襟畳　四枚
珍形万古焼土瓶　一個
珍形樺大火鉢　一個
白木運判　一個
立山古木（地獄谷）一個
がんどう　一挺
二間莫蓙（無地）　二枚
冂製双盤　壱對
柳行李　一個
黒襦子打敷（真明）一枚
白木正門新築
炭入箱　一個
十一丁裏
樺製大火鉢十個
大正四年七月　着ふとん三枚
十二月　桐製煎茶々椀入一ツ
五　神代枕額　大小二個
十二月　白木障子　四枚
六年五月　大花瓶　一對
箱付
〃　斜水金鋺　二個
箱付
正門戸　二枚
ウルシヌリ机　一個
七月　白木桟口戸　二枚
〃　敷ふとん壱枚
同　竹模様珍形皿十枚
十二月　奥ノ間上下違棚
五年一月　神明造神棚　一個
六年　佛器金鋺　三個
箱附
〃　上馨　一個
〃　大香炉　一個
箱付
〃　柄香炉　一個
護摩道具一式
十二丁表
七年度　一額渕布団　一枚
一今上牌　一本
一皆朱三宝　二個
一十露盤　一挺
九年　〃　径七寸伏セ鐘　壱個
〃　四尺障子　四枚
〃　菓子はん　三十人前
〃　二階小襖間　四枚

○布團入大長桂　壱個
着布とん　大小　廿一個
内十五アリ
○日用夜具　三個
下等ざぶとん　十枚
敷寐ござ　十枚　廿三枚
茶枕　二個
○かちうす（大キネ附）　壱個
○膳箱古　大小　三個

茶用器

菓子器日光木地　壱個
万古焼菓子器　壱個
カゴ形ナリ　箱入
がらす菓子入　壱個
欅角茶盆　壱個
○古　てつびん　壱個
薬　飾　茶沸　壱個
柘榴茶入　日光　壱個
○茶入　かめ　壱個
九谷茶呑　上　三個
外文字内白茶碗　五ツ
急須（万古ト滑レ常）　二個
こつぷう　三個
朝顔形角色茶碗　五個
○古朱出焼　四個
銀色茶卓　五枚

○中長持　二個
客用夜具　二個
上等座布とん　五枚
夏ござ　十五枚
ござ枕　内五　二十個
○古かばん　小　壱個
○挽うす　二個
○織機物　全部
金たらい　二個

黒塗器　壱個

八丁表

○万古山水絵同　壱個
箱入
元禄茶盆　壱個
桼島盆　壱個
宝袋形鉄じん　壱個
武力茶入　大小　二個
白地焼菓子入　壱個
九谷水指　一本
九谷茶碗　壱組
湯さまし　三個
但シ一ツハ貝製

八丁裏

川島逃石茶碗　一組
○外菊模様茶セん　四個
○仙徳茶卓　五枚
薩摩焼湯呑　壱個

紅葉絵湯呑　壱個
茶こし　壱ツ
抹茶々椀　三個
同紫ふくさ　壱ツ
袋入抹茶碗　壱個
同赤色　龍模様　壱個
朱用盆　宝珠玉　壱個
小形色々ノ混合　十五個内五ツ
角中ニ文字アル菓子入　壱個
新川焼一輪ざし　壱個
運板　壱枚
元禄盆古額　壱個
硝子入中額　壱個
乃木将軍入
古木瘤煙草盆　壱個
古木止鳥瘤　壱個
万年茸額　壱個
（但シ佐伯潔書）

三徳　下上　弐個
○踏継　壱個
○よき　古　壱挺
○鎌　二挺
○とんぐわ　壱挺
○十露盤　壱挺
座敷炭入　壱個
小形せんば　壱個
火鉢用火箸　三對

相馬焼　壱個
短冊指柱掛　壱枚
茶筌茶杓附
なつめ　壱個
青色蓋附建水　壱個
共蓋焼物水指　壱個
朱出焼茶セん　五ツ

九丁表

貝　銘々盆　五枚
九谷焼一輪ざし　一個
床置ノ花ざし　壱個
手洗鉢　自用　壱個
硝子入小額　壱個
古木柱掛一輪ざし　壱個
岐阜提灯　壱ツ
床飾古木瘤　壱個
寫眞ざし　壱個
寒暖計　壱個
新聞はさみ　壱個

九丁裏

七輪　中形　壱個
こうもり傘　三本
なた　内一丁　二挺
千葉鍬　壱挺
鍬　二挺
柱掛　幽石竹画　壱個
専賣噴火筒　壱個
水文字火吹　壱本
洋爐　大　壱個

○金鎚　二挺
小鋸　壱挺
棕櫚箒　壱本
曲尺　弐本

皆朱膳箱入　廿人前
皆朱丸櫃　壱個
皆朱丸盆　二ツ
○坪椀箱入　拾人
木地平椀　廿人
○黒汁椀　十人
青模様大皿　廿個
錦手中皿　十九個
○白地小皿　二十個
錦手茶碗　十四個
大山焼蓋附茶碗　廿八個

猪口混合　三十一個
内十個
○杯洗　壱個
盃　廿七個
かし椀錦蒔絵　廿個
近迎重　廿人前
内十人
以上箱附ノ1
三ツ丼　壱組
大盆　黄赤塗直　三個
宮嶋盆　大小　四個
徳利　八本

かんな　二挺
錐　大小　二本
五分のみ　一挺
一閑張葉書入　壱個

五丁裏

仝五分高膳　五人前
飯櫃台　壱個
○旧平椀箱入　十人
○大椀箱入　十人
汁椀中赤　廿人
錦手大皿　二十個
大平皿　拾二個
並中皿　十個
○並小皿　十個
平茶附茶碗　十四個
○蓋附茶碗旧　二個

六丁表

錦手大丼　三個
○朝顔花形丼　二個
茶呑茶碗　廿個
錦蒔絵吸物椀　廿個

丼　混合シテ　六個
錦蒔絵角盆　二個
丸黒盆　二個
○ちろり　二ツ

三ツ組台附杯　一組
○八寸御膳　廿人前
○三ツ組赤絵　壱組
○旧大皿珍品　五組
台所用大戸棚　壱組
○漬菜桶大　壱本
○八升鍋　壱個
○三升鍋　壱個
一升五合なべ　二個
五升釜　壱個
○手桶　二個
つるべいトタン製　三個

○飯びつ　大　二個
○苧桶　二個
○古大はち　壱個
○錆茶釜　壱個
土びん　大小　四個
かご　大小　四個
○といづけ　三個
○赤小重　四個
○角榻盆　壱個
日用茶入飾　大小　三個

六角小盆　十枚

小形茶呑茶碗　十個

六丁裏

○令小八寸膳　五人
辨当入　壱個
したじつぎ　壱個
○味噌桶　五本
○外ニ桶　四本
○四升なべ　壱個
○二升鍋　壱個
○壱升なべ　壱個
○旧せいろう　三個
馬尻　三個
○大米櫃　壱個

七丁表

令　混合　内三　六個
○古釜　大　壱個
○石わ口とう　壱個
○日用茶釜　二個
武力物入　九個
張金製かご　壱個
○いかり　壱個
黒大重　三個
武力菓子入　四ツ
鉋丁　大小　四挺
内二丁
○廣蓋　大小　三個

七丁裏

輪燈菊花紋蔓　壱對　谷村ゟ持参
○令丸蔓　壱對
○三千佛名経　壱部
○常香盤　壱個
○古目奥　壱個
○位牌　沢山
○茶湯茶鋺　七ツ
菓子盛六角　二對
紋入打敷　壱枚
○立山縁記入箱　壱個
カウセ蓋箱　二個
但シ書画入リ　内一ツ

小前机一方金　壱個
白木小目奥　壱個
仏供膳　弐枚
○佛供日々金鋺　七ツ
○拝敷　壱枚
丸菓子飾（金塗）　壱對
不断用打敷　二枚内一枚
掛物入箱　壱個
○赤丸佛菓器　一對

三丁裏

諸道具調査表

（旧廿七畳）
畳　四十七畳半
障子黒渕　壱走
襖　内十二枚　拾八枚
九尺間障子　四枚
○色々ノ板　十三枚
小襖仏間　四枚
但シ屋内ノ板ダケナリ
丈長二枚折　壱枚
卍老ノ書
三尺二枚折　壱枚

黒桟古戸　四枚
障子白木　壱走
六尺襖　二枚
○板戸　拾壱枚
小襖〃　六枚
障子（元奥間ノ分）　壱走
三尺二枚折　壱枚
富山名所絵
小二枚折　壱枚

四丁表

床花台鉛色　壱個
五人寄書額　壱枚
玉泉画額　壱枚

同赤色　壱個
周吉民山水　壱枚
辨栄ノ書額　壱枚

水レ山画額　壱枚
二間縞ゴザ　三枚
清涼簾　四枚
伊予簾　四枚
竹簾三尺　二枚
○からつ火入　壱ツ
古釜火鉢　壱ツ
東どうこう　壱個

上水手洗鉢　壱ツ
椅子　壱脚
弓張　弐張
新小簞笥　壱ツ
○総桐簞笥　壱ツ
茶棚　三ツ
石笠五分　二ツ
二分台　三ツ
四方ガラス角燈　壱ツ
夏ノ掛燈（三方ガラス）　壱ツ
三味線時計　壱ツ

四ツ足机　壱個
小机　壱個
文庫　壱個
○けづり盤　大小　二枚
柳行李　二個
○古帳入小簞笥　壱ツ
○桐小引キ出シ　壱個

縞莫座六畳　二枚
渋紙八畳　壱枚
令　三尺　二枚
令　三尺　六枚
煙草盆　四ツ
欅丸火鉢　壱ツ
角火鉢　貳ツ
祭檀　壱ツ

四丁裏

屋倉新旧　二ツ
高テーフル　壱ツ
○古小簞笥　壱ツ
前桐簞笥　壱ツ
角ノ塗つゞら　壱ツ
竹台洋燈　壱本
台洋燈（内一本）　二本
つり洋燈（二分五分三分）内四ツ　六個
仝　小形　壱ツ
大時計　壱個
目覚時計　壱個

五丁表

○二枚足机　壱個
四ツ足床台　壱個
欅断板　壱枚
掛硯箱　壱ツ
○古竹行李　大小　二ツ
○神棚　壱個
水かめ　大　壱個